



## 講演会レポート

### 韓国・平和博物館 活動家／金英丸氏による講演会

『STOP戦争への道！』のDVD上映会（5月27日・全水道会館）

2013年5月27日、東京・水道橋の全水道会館にて「韓国・平和博物館 活動家／金英丸（キム・ヨンファン）氏による講演会と『STOP 戦争への道！』のDVD上映会」が行われました。

DVD 上映『STOP 戦争への道！』では、日韓「慰安婦問題」、憲法 9 条にまつわる重要なコンテンツがコンパクトに纏められたイントロダクションから始まりました。憲法 96 条改憲の後に憲法 9 条を改正しようとする思惑について、誰が観てもその意図と意味がわかりやすいように制作されていました。「憲法・法律は国の歴史であり、再び戦争の惨禍が起きぬよう、憲法 9 条を守らなければ！」と、気持ちを新たにしました。

DVD 上映後、当日急遽韓国から来日された活動家・金英丸（キム・ヨンファン）氏の活動家としての紹介と講演がなされました。金氏は日本に強制連行された朝鮮人の遺骨収集活動をしており、少々逞しいお坊さんのような朗らかな人柄が印象的でした。

金氏は、母親が戦前日本に住んでいたこと、自身の日本の関わりなどを紹介されました。北海道



金英丸さん

の活動紹介では「笹の墓標展示館」の話から始まり朱鞠内（しゅまりない）のダム建設における過酷な労働の果てに、日本人労働者と韓国人労働者が犠牲になった話を語られました。

現在、北海道で行われている共同遺骨収集ワークショップでは、ボランティアで参加した学生が「家族的な結びつき」を持ちつつ、日韓交流の橋渡しをされている人もいます。

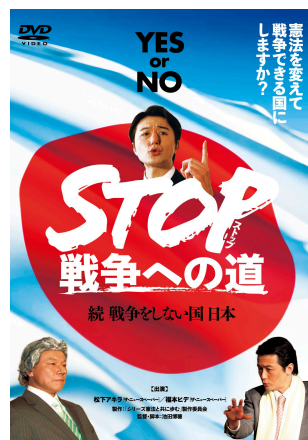
金氏の講演から、「人と人との交流」こそが、平和への一番の近道だと学び、まず人と人が出会い、理解しあい、行き来する、というシンプルなものが平和への近道だと、強く感じました。その他に韓国、北朝鮮、日本などを行き来する体験談から、日本のメディアの偏った報道により、現状

の把握が偏見に繋がっている事実を知りました。特に北朝鮮に関しては、日本でメディアから得ることができる情報量が少ないため、子どもたちがどんなに苦しい生活を強いられているのか…。その中で子供たちの育成を補助するための取り組みが韓国・日本で進められていることを、初めて知りました。理想論ではなく、思想から生まれる行動により、子供たちの未来のために、一日一日を積み重ねてゆく支援活動に胸が熱くなりました。私にとっては大変貴

重な聴講となり、充実した一日となりました。

(たまちゃん)

DVD  
「STOP 戦争への道！」  
2013 年／日本／30 分  
シリーズ「憲法と共に歩む」製作委員会



#### 【特別連載・最終回】

### 自主・自立の復興とその支援—ふたつの「被災地」から〈3〉

今野順夫 (福島大学名誉教授)

大震災・原発事故の被災は、収束とはいえ、未だに増幅していることを、特に福島県内の 3 つの市町村の震災関連死の審査にかかわって、痛感している。福島県において、地震や津波での直接死が 1599 人に対し、避難等での関連死は 1415 人になり(\*1)、原発事故による死者はないという事業者や政治家の発言に耳を疑う。被災地の形状的な復興とは別に、被災者の心身の回復が、重要な課題となっているなかで、改めて支援のあり方を考える時と思っている。

#### ▼被災地住民の思いと支援者の思い

震災後 2 年 3 カ月は、被災地住民の状況にも、心のあり方にも大きな変化を生じさせる。支援の難しさは、その住民の被災からの

復興の状況や心の中が、一様ではなく、複雑に錯綜していることである。

被災当初の支援のあり方は、どの地も、どの被災者にも、程度の差はあれ、共通的なものであった。まずは衣食住を賄うことから出発し、雇用や生業の確立への支援を経るが、地域社会の自立へ向かう地域づくりが前面に出てくると、被災者と支援者の間にも微妙なズレを感じる。被災者から、自分にとっての「復興」は、自分と家族の生活の再建であり、支援者の掲げる「復興」とは違うとも言われた。

震災前と全く同一の街の復旧であればそれほど難しくないのかもしれないが、街全体を嵩上げし、また高台移転のなかで、全く新しい街づくりが模索されている。そこでは、何

十年と経過して街を作りあげてきた被災者の思いと、合理的な街づくりの志向をする支援者の思いを一体のもととして繋ぐのは、容易ではない。

### ▼自立を支援することの重要性

いろいろと被災者と支援者とのグループ形成の提案をしていると、支援者からの提案は有難いが、この時点ではむしろ被災地を忘れてもらって、自ら課題としているところに力を集中したいと言われ、反省したことがあった。支援者の善意の被災地視察も、被災地自らの課題解決への営みをストップさせてしまう。現地人手不足のなかで、一番要望が強いのは、被災地に一定期間在住して支援して欲しいということだが、容易ではない。

震災直後の支援でも、自力で立ち上がろうとする地元商店の前で、無料の支援物資の配布がなされ、商店自立を困難にしているとの批判をされることがあった。善意の支援でも、被災地の商店から物資を買い、自立を助けて欲しいとの指摘であった。

率直に言えば、被災地の復旧・復興は、被災地住民・被災者の自立に向けた営み以外には、考え難い。被災者の自立能力、自立志向・努力なくしては、被災地を自立させるのは難しい。

被災者に「寄り添う」ことの難しさを感じず。図式的には、時間の経過とともに、被災地・被災者の意思と力が、次第に上昇しつつある中で、その支援のあり方にも変化を求められる。先日の「ふくしま復興支援フォーラム」

において、郡山市にある富岡町からの避難者中心の仮設住宅で組織された「おたがいさまセンター」を運営している天野和彦氏は、その運営の経験から、「組織的・体系的な交流と避難者自らの自治の形成」の重要性について強調していた。そこには、自立に向かい、自治を形成するなかで、復興を追求しようとする被災者の力強いメッセージがある。

### ▼被災地・被災者に「寄り添う」支援

原発事故避難で、浪江町から福島市の仮設住宅に住んでいる老婦人の話にはっとさせられた。多くの高齢者は、故郷への帰還の願いは強いが、除染がなかなか進まないなかで、「帰る」ことの困難さに落胆だけしないで、残された人生を、この避難先の地で充実させたいとの話であった。それも避難者の選択の一つである。選択肢も単純ではない、安易に押しつけることではなかろう。

「忘れないで欲しい」といいつつ、「忘れて欲しい」という。支援者は、被災地・被災者の声に耳を傾けつつ、被災者の自立・自治の力での復興を後押しすることが必要ではないのだろうか。そのためには、被災地・被災者の現実を直視し、被災地及び支援者間のネットワークを堅持して、被災地の声を絶えず伝え続ける活動こそが重要だろう。

(※1) 福島県発表（福島民報 2013 年 6 月 17 日付）。

## シアター 映画をみよう③

### 『人生、ここにあり！』—— 個人の尊重を実現するために

#### ◆あらすじ

世界に先駆けて精神科病院を廃止したイタリア。病院という檻から解放されたかつての患者たちは、民主的な生活協同組合が運営する労働の場を提供され、自由な毎日を得たかのように見えた。しかし彼らに用意されたのは、封筒の切手貼りだけだった。

異動でやってきたネロは、精神的に不安定な彼らを「個性を持つ一人ひとり」として尊重し、単純作業ではなくそれぞれの特技を生かして「お金を稼ごう」と提案し、働いて稼ぐことに意欲を見せ始める彼らと事業を始める…。

#### ◆多少の助けが必要な人たち

何か気に入らないことが起きると暴れだす。自分の頭を殴りだす。わめき散らし、誰かを罵倒し始める。常に何かしらの不安を抱え、怯え、他人と目を合せようとしない。同じ言葉を繰り返し、室内を走り回る…。精神的な問題を抱え「他人と一定の関係を保ちながら、普通の生活を送ることができない」とされる人たちは、確かに存在する。しかし、そのような人たちを部屋に閉じ込め、果たして病気は治るのか。

1961 年、イタリアの精神科医フランコ・バザリアは、精神病院の患者たちを自由にする運動を始

める。学生運動の経験を持ち、精神疾患患者への「個人の尊重」をうたった彼は「治療者は、病気ではなく患者の‘苦悩’と闘え」と説いた。人は多かれ少なかれ、精神的に弱い部分を持つ。原因や状況、疾患がどんなものであれ、多少の助けが必要な人に、手を差し伸べることができる人が応えること——「狂気と理性の共存」(バザリア)を社会が許容し、人びとが共に生きる努力を続けることが不可欠なのだ。

#### ◆一人ひとりの「生きる」

劇中では、たくさんの廃材から芸術的な床貼りを創り出し、自立した生活を徐々に実現させていく元患者たちの人生を陽気に明るく、そして厳しい現実と直面するシリアスな場面を含め描く。

病気は、個性とは呼べないかもしれない。それでも、生きて日々を営む個々のいのちと権利が、踏みにじられていいわけがない。「いまここに生きているんだ」という実感を思い起こさせる映画だ。

(M.A.)

『人生、ここにあり！』

監督：ジュリオ・マンフレドニア

2008 年／イタリア映画／111 分

配給：エスパース・サロウ

#### ■HuRP 後援・イベントのおしらせ■

### 『日本国憲法を実現するフォーラム——世直し弁護士とともに』

◇ 日時：2013 年 7 月 14 日(日) 13:15～／場所：青山 こどもの城 本館研修室 9 階

◇ 講演：宇都宮健児(弁護士・日本弁護士連合会前会長)／伊藤真(弁護士・伊藤塾塾長)

池住義憲(立教大学大学院教授：フィールドワーク、平和学)

主催：命・地球・平和産業協会 協賛：全日本民主医療機関連合会、PARC 自由学校

【お問合せ】 命・地球・平和産業協会 担当(渡辺)：080-3175-9992

メール：vitamin\_kazuko@yahoo.co.jp

【編集後記】▼蒸し暑く、雨が降ったり止んだり…例年に比べ晴れ間も多い今年の梅雨。水不足が心配です。そして 7 月の参議院選挙も気になるところ。暑い夏に、冷静で意味ある判断を投票に反映したいものです。(望)

特定非営利活動法人 人権・平和国際情報センター Human Rights and Peace Information Center Japan

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-17-8 丸十ビル 402 号 電話&FAX 03-6914-0085 <http://www.hurp.info/>